

検定試験のための診断項目

著者	原田 寿美子
雑誌名	名古屋学院大学論集 言語・文化篇
巻	19
号	2
ページ	25-32
発行年	2008-03-31
URL	http://doi.org/10.15012/00000547

検定試験のための診断項目

原 田 寿美子

1. はじめに

本論では、研究奨励金を得た、「検定試験のための『診断・学習』教材の開発」の一環として、中国語関係の検定試験に対応する実力を測るための診断すべき項目を検討したい。

中国語教育においては、1950年に開始した新中国の対外漢語教育(外国人——正確には海外在住の華人などのように中国語が第一言語でない学習者全般を含む——に対する中国語教育)やその後実施されているHSK(汉语水平考试)などの検定試験に関係するいくつかの基準(大綱)が出され、またこれらについての議論もなされている。

基準には、発音や聞き取りのように技能に関するものと、文法事項や語彙のように知識に関するものがあるが、ここでは、文法事項を中心とする知識に関して、研究の目的である診断に用いるための必要項目を検討したい。

文法項目では、参考とすべきは、《汉语水平等级标准与语法等级大纲》その他の“教学大纲”や、中国語教育学会が作成している教学ガイドラインなどのように日本の中国語教育において検討されつつある基準と考えられる。ただし、本稿で目的とする項目をまとめる際には、これらを参照しながらも、次のことを考慮しなければならないと思われる。

ひとつは、レベルの問題である。対外漢語教育に関する基準は、通常レベル別に設定されて

いるが¹⁾、実力を測る時点では、これらを縦断的にまとめる必要がある。また、これは本学に限らないが、中国語を専攻の語学とする場では、同学年に、中国語学習歴の異なる者や中国語を母語とする者²⁾が混在しているのが通常であり、その比率も例外的に扱えるほど低くはない。つまり、もっとも基本的な事項が修得できてない学習者から教学基準で最も高いレベルとして扱われる項目を問題にしなければならない学習者までを対象とする必要がある。

もうひとつは、検定試験において要求される能力の範囲が以前より広がって来ていることである。このところ、C-TEST(实用汉语水平认定考试)やBCT(商务汉语考试)、ビジネス中検のように、実用的な運用能力やビジネスで使える能力を測ることを目的とする検定試験が実施されるようになり、また、従来からある試験でも、時事的な話題の文章やビジネス・経済方面の語彙を含む出題内容が見られる傾向が出てきており、このような範囲を含めて対応を考えなければならないようになってきている。

以下では、示されているいくつかの基準と、上記のような要素を考え合わせて、必要と思われる項目をまとめてみたい。

2. 項目の選定

教学の基準では、「1.」で述べたレベルのそれぞれについて、“词类”(品詞)、“词组”(語句)、

“句子”（文）のなどの階層についての基準が例示されている³⁾。

上記の基準では、たとえば、“词类”の“动词”を例に取ると、“甲级语法大纲”（甲級文法大綱）は次のような三項目から成っている。

来二斤糖
赶（赶火车 / 赶到机场）
冒（冒雨 / 冒着危险）
为（选他为代表）
看（你看怎么办）

（三）动词

9 【甲009】1.一般动词

看 写 打 参观 爱 想 喜欢
希望 像 姓 在 进行

10 【甲010】2.动词重叠

想想 看看 学习学习 研究研究
说（一）说 试（一）试 听了听
走了走

11 【甲011】3.助动词

能 会 要 想 可能 可以 愿意
应该 得（děi）

「1.」は「一般動詞」として10個余りの動詞の例示,「2.」は「動詞の重ね型」としてこの形式の取り得るいくつかの型の例示,「3.」は「助動詞」として助動詞9個の例示である。一方“乙级语法大纲”（乙級文法大綱）では“动词”の項目は一つで、以下のように例示がある。

（三）动词

134 【乙005】作为

善于
具有
加以
引起
显得
搞
弄
肯
上千人

例として挙げられている動詞は、甲級のそれに比べて注意を要する用法のものであるが、付された用例の中には“为”の用例“选他为代表”（兼語文）のように文型的な知識が必要なものも含まれている。

本論では、学習者が知識として知るべき文法項目を、レベルを縦断して、できるだけ整合した形にまとめたいので、上記の例について言えば、「動詞の重ね型」、助動詞の文、兼語文などを文法部分の項目として立て、挙げられている動詞自体は「語彙」としての知識の有無を問うことになる。

以下では、必要な項目を検討していきたい。

3. 項目の概要と大綱類との関係

3.1 漢字、語素について

《汉语水平词汇与汉字等级大纲》では、漢字の等級（“甲，乙，丙，丁”）が示されている。学習者は、通常、漢字を何文字知っているかということは、単語をいくつ知っているかということほどは気にかけないが、中国語では二文字以上の単語や語句が辞書に記載されていない場合もあり、そのような場合に語彙の意味を推測する手がかりとなる漢字単位の知識は実際には必要なものである。また、時事的な文脈やビジネス関係の文脈では、新語や外来語が用いられることが多いが、全く新しい語彙である場合は、漢字単位の知識や時事的な事柄についての知識によって意味を推測することが可能で

ある。ただし、これを項目として直接リスト化するのには、学習者にとって、普段の学習対象との隔たりが大きいものとなる。単語レベルのリストを作成する際に、これらが要素として含まれることを念頭におくのが望ましいと考えられる。

3.2 語彙・慣用句

語彙については、具体的には、確認が必要なものを選定したリスト（原田2001. 2のような形のもの）を用いることになるが、文構造において重要な役割を担う語彙については、文型の範囲でも例として項目化することになる。以下では、項目化する際の考え方を述べる。

3.2.1 単語

単語については、文型と関わるものは、文型の枠内で項目とするが、単語単位の知識（品詞、意味）としては、《汉语水平词汇与汉字等级大纲》などに挙げられている語彙についての等級や数が目安となる。ただし、基準では、品詞は示されているが、その品詞の範囲で複数の意味を持つ場合に、どの意味の用法が該当範囲であるのかは示されていないので、それぞれの級のレベルを逸脱しないと考えられる意味を項目とすることが必要と思われる（原田2001. 3）。

また、現在の検定試験で要求される語彙知識には、新語や外来語、ビジネスシーンで用いられる語彙などが含まれる。このような範囲の語彙は、表記や使用状況が流動的で、把握しにくい面があるが⁴⁾、現時点で必要と考えられるものについては、リストに含めたい。これら以外にも、数に関する表現が重要な部分となる。百分比や分数などの基本的な表現以外にも、実際の場面で用いられる単位などを含む必要がある。

3.2.2 離合詞と搭配

離合詞と搭配については、単語や熟語と併せてリスト化するが、離合詞に関しては、下記のように、文法項目の範囲でも例として扱うことで、用法面の知識を確認する項目となる。

例：留过学（留学したことがある）＜留学（アスペクト“过”の用例として）

游了一天泳（一日泳いだ）＜游泳（数量補語の用例として）

3.2.3 兼類

教学基準では兼類が挙げられるのが通常であるが、これについては、品詞を意識させるとともに、例の意味が正しく理解できるかどうかを項目とする必要があると考えられる。

3.2.4 成語、慣用句

《汉语水平等级标准与语法等级大纲》（以下、「文法大綱」とする）で言うところ、乙級の“二 固定词组”，丙級の“四 固定词组（一）习用语，（二）成语，四字格，（三）其他”，“五 固定格式”の後半，“十 口语格式”，丁級の“四 固定词组（一）习用语，（二）成语，四字格，（三）其他”，“五 固定格式”の後半，“八 口语格式”に取り上げられているもの。中国語学習の後半段階では必ず必要な知識であるが、特に“口语格式”にあるようなもの（例：丙級【丙316】说X就X，…；说走就走，…/ 丁級【丁377】…不+动词1+不+动词1+也得+动词1…；…不说不说也得说几句吧。）については、学習者の知識が不足している場合が多く見られ、例示の分量等には注意を要する。

3.3 特定の“词类”（品詞）を用いる形式

文法大綱では、“词类”（品詞）の範囲に含め

られるが、介詞、助動詞、副詞、助詞のいくつかについては、これを用いる文型として診断例とする。以下、項目とするものを箇条書きで挙げる。

3.3.1 介詞

- ・介詞のリスト（語彙リストとして）
- ・注意すべき用法の介詞：“把”の文、文頭に置けるもの（“对于”等）、動詞との組み合わせで注意すべきもの（“向…学习”等）、動詞の後に置ける介詞（“自”等）

3.3.2 副詞

- ・副詞のリスト（語彙リストとして）
- ・注意すべき副詞の用法：部分否定について（“不很”等）、慣用表現（“等…再～”“连…都/也～”等⁵⁾）
- ・“一…也/都～”の形⁶⁾
- ・“…疑問詞…也/都…”の形⁷⁾

3.3.3 助動詞（能願動詞）

- ・助動詞を用いる形式
- ・助動詞のリスト（語彙リストとして）
- ・否定形の注意すべきもの（“不要（别）”等）
- ・使い分けが問題になるもの（“会”と“能”）

3.3.4 語気助詞

- ・語気助詞のリスト（語彙リストとして）
- ・具体的な意味を持つものや、文型との関連で注意すべきもの（“吗”，“吧”，“呢”等）

3.4 文単位の形式

文の分類としては、“主谓句/非主谓句”（主語述語を備えているかどうかによる区別），“动词谓语句/形容词谓语句/名词谓语句/主谓谓语句”（述語の種類による区別），“陈述句/疑

問句/祈使句/感叹句”（文の用途による区別）のような区分がなされる。ここでは、診断項目として、次のものを挙げる。

- ・“动词谓语句/形容词谓语句/名词谓语句/主谓谓语句”（動詞述語文/形容詞述語文/名詞述語文/主述述語文）の組み立てや解釈：動詞述語文の二重目的語構文、主述述語文の述語が並列になる形式、等（動詞述語文の内、“特殊句型”（特殊文型）については、直接に項目とする。）
- ・“疑问句/祈使句/感叹句”（疑問文/命令文/感嘆文）の形式、疑問詞のリスト、疑問詞の用法
- ・反語文（“反问句”）の形式：疑問文の形を用いるもの、特定の語句（“难道，何况”等）を用いるもの

3.5 文中に現れる表現形式

文の一部に現われる形式として、以下のものを取り上げたい。

3.5.1 重ね型

- ・動詞の重ね型
- ・形容詞の重ね型
- ・名詞の重ね型
- ・量詞の重ね型

上の内、動詞の重ね型については、“看一看”（「ちょっと見て下さい」：祈使句）のように文全体の陳述に関係する場合や、“看了看就说…”（「ちょっと見て、言った…」）のように文の時間の流れに関する場合を、例として用いる。形容詞の重ね型については、“好好儿hǎohǎor地”（「しっかりと、よく」）のように、重ね型にした場合の発音や状語の“地de”との共起を例

として用いる。

- ・“动词/形容词+极了/坏(了)/透(了)/死(了)”の形式

3.5.2 定語

- ・助詞“的”を用いる定語，名詞が定語になる際に“的”を用いなくてよい場合（“我哥哥”，“中国电影”など）

前者の「程度」の表現については，文法大綱の上級に挙げられているものまでを含む

3.5.3 状語

- ・助詞“地”を用いる状語（形容詞の重ね型を用いる場合を含む）

3.6.4 様態補語⁹⁾

- ・“动词/形容词 + 得…”の形で，「…」の部分が簡単なものから複雑なものまで

3.5.4 アスペクト

- ・“动态助词：了，着，过”を用いる各アスペクトの表現
- ・進行の表現（“在…呢”）
- ・回想の表現（“…来着”）

3.6.5 数量補語

- ・動量補語，および時量補語について，目的語との位置関係などから可能な表現形式

3.6 補語の形式

補語の形式は，以下の六つの形に分類して取り上げたい。

3.6.6 可能補語

- ・肯定形と否定形の形
- ・方向補語や結果補語に対応するもの
- ・上記以外のもの（“…不得”等）

3.6.1 結果補語

- ・結果補語の形式
- ・動詞や形容詞と結果補語との組み合わせの例のリスト
- ・文形式との関係（目的語を伴うものなど）

3.7 特定の文型

いわゆる“特殊句型”（特殊文型）と言われる類のものを，以下のように取り上げたい。

3.6.2 方向補語

- ・方向補語の形式
- ・方向補語全体⁸⁾
- ・“引申意义”（派生義）の用法
- ・目的語が条件によっては方向補語“来，去”の前に置かれる例

3.7.1 存在現象文（存現文）

- ・存在、出現・消失を表すもの
- ・自然現象の表現（例：“下雨”）

3.6.3 程度補語

- ・“动词/形容词+得+程度”の形式

3.7.2 連動文

- ・前後の部分が時間的前後を表す例
- ・後の部分が目的を表す例
- ・前の部分が方式を表す例
- ・後の部分が結果を表す例
- ・“有”の連動文
- ・連動文の中に兼語文が含まれているもの（文法大綱の，“连动句套兼语句”）

3.7.3 兼語文

- ・使役文
- ・呼称・認定の文
- ・理由の兼語文（文法大綱の“表愛憎意味的兼語句”）
- ・“有”の兼語文
- ・兼語文の中に連動文が含まれているもの（文法大綱の“兼語句套連動句”）

3.7.4 受身文

- ・“被，叫，让”などを使う受身文の形
- ・上記以外の受身（“为…所～”，“受”，“挨”等）
- ・意味上の受身
- ・受身動詞として，あるいは動詞の前に置く要素として“給”を用いる形

3.7.5 比較文

- ・比較文の形（“跟…一样，比…～，不必…～，没有…这么/那么～，最…，比+疑问词+都…，不如…～”等）
- ・関連した慣用句（例“一天比一天”）
- ・様態補語と“比”の比較文とが組み合わせあった例（例：他比我跑得快/他跑得比我快。）

3.7.6 “是…的”文

- ・“是…的”の強調構文の形式（目的語と“的”との位置関係を含む）と意味
- ・上以外の“是…的”文

3.8 複文・緊縮文

複文と緊縮文については，以下のような形で取り上げたい。

- ・複文の以下の各類型について，関連語句（接続詞，副詞）の使用パターン，あるいは，使用しない形。

并列復句，承接復句，递进復句，因果復句，选择復句，条件復句，转折復句，假设復句，目的復句，让步復句，解说復句¹⁰⁾

- ・緊縮文の例（慣用的によく用いられる文を含む）

- ・疑問詞の呼応形式

例：你怎么说，我们就怎么做。（複文）

你想吃什么就吃什么。（緊縮文）

- ・複文が二重あるいはそれ以上に重なった文（“多重复句”）

文法大綱では，異なる級で同じ類型を挙げる場合に，各級においては異なる例——つまり関連語句の前後の組み合わせの異なるものを挙げる形でレベル差に対応している。教学時には，このように典型例から示して行くのが妥当であるが，実際には，複文の関連語句は前後の部分で，一対一に対応するとは限らない——つまり，ある類型で，前の部分に現れ得る関連語句が複数あり，後の部分でも同様に複数有る。また，関連語句を使わない場合もあり得る。ここでは，類型ごとに，可能性のある関連語句使用の複数のパターンを用例としたい。

4. おわりに

以上が，診断項目として使用したいものの概略である。参照した対外漢語教育のいくつかの基準は，数学上の各段階における目安となる項目であるが，全体の構成や特定の表現をどの部分に含めるか等においては，本論で目指した形は，何箇所かで注釈したように，かなり異なるものとなった。

これらの知識項目に基づいて，原田（2007）にさらに上級水準部分を加えた診断例データ

ベースを作成し、診断・学習に適用して行きたい。

本論は、2005年度研究奨励金によるものである。

注

- 1) 上記書の“三等（初等水平，中等水平，高等水平），四级（甲级，乙级，丙级，丁级）”。“甲级”と“乙级”が“初等水平”に，“丙级”と“丁级”がそれぞれ“中等水平”と“高等水平”にあたる。
- 2) 中国語が相当レベルに使える場合にも，たとえば“写”（書く）の能力が十分でないなど，補うべき技能や知識がある場合がほとんどである。さらに，基本の四技能——“读，听，说，写”（読む，聞く，話す，書く）に加えて上級レベルでの五つめの技能とされる“译”（訳す）を考えると，十分にできる場合はまず見られない。これは，語彙と文型の知識の問題が大きいと考えられる。
- 3) 上のレベルの等級では，“词类”の下位要素である“语素”（形態素）や“句子”の上位要素である“句群”が加わる。
- 4) 検定試験によっては，《商务汉语考试大纲》のように参照できる語彙リストを示している場合がある。
- 5) “连…都 / 也～”（…さえも～）の形は，文法大綱では，分類上は，甲級の“八 强调的方法”の中に“反问句”と共に挙げられている。
- 6) 原田2007では，「ひとつも文」としたもの。
- 7) 原田2007では，「すべて文」としたもの。
- 8) 補語の内，方向補語のみは限られた範囲のものである。
- 9) 文法大綱での名称は，“情态补语”。
- 10) 文法大綱では，緊縮文は，“紧缩复句”として，文中のような複文の種類と同列に置かれている。しかし，“紧缩复句”以外の複文の分類は，前後の意味関係によるものであり，緊縮文の意味構造自体が，複文の前後の意味関係に当たるもの

を含むものであるので，ここでは，複文と緊縮文を同列におき，それぞれの意味構造上，いくつかのパターンがあることを用例に反映したい。

主要参考資料

- 北京语言大学汉语水平考试中心 编制《中国汉语水平考试大纲 初、中等2006年修订》现代出版社 2006年2月（1989年11月）。
- 编制《中国汉语水平考试大纲 基础》现代出版社 2003年10月（1989年2月）。
- 国家对外汉语教学领导小组办公室汉语水平考试部《汉语水平等级标准与语法等级大纲》高等教育出版社1996年6月。
- 《汉语水平词汇与汉字等级大纲》北京语言文化大学出版社 1997年（1992年）。
- 李开 编著《汉语语言学和对外汉语教学论》中国社会科学出版社 2002年8月。
- 李泉 主编《对外汉语课程、大纲与教学模式研究》商务印书馆 2006年7月。
- 主编《对外汉语教学理论研究》商务印书馆 2006年7月。
- 鲁健骥《对外汉语教学思考集》北京语言文化大学出版社 1999年7月。
- 吕文华《对外汉语教学语法体系研究》北京语言文化大学出版社 1999年10月。
- 孙瑞珍 主编《中高级对外汉语教学等级大纲 词汇・语法》北京大学出版社 1995年10月。
- 王钟华 主编《对外汉语教学初级阶段课程规范》北京语言文化大学出版社 2001年2月（1999年5月）。
- 杨寄洲 主编《对外汉语教学初级阶段教学大纲1》北京语言文化大学出版社 1999年9月。
- 赵建华 主编《对外汉语教学中高级阶段功能大纲》北京语言文化大学出版社 1999年9月。
- 赵贤州，陆有仪 主编《对外汉语教学通论》上海外语教育出版社 1996年6月。
- 中国国家汉语国际推广领导小组办公室、北京大学商务汉语考试研发办公室 编《商务汉语考试大纲》北京大学出版社 2006年8月。
- 赵金铭 主编《对外汉语教学概论》商务印书馆

2005年3月（2004年7月）。

王还 主编《对外汉语教学语法大纲》北京语言学院出版社 1995年4月。

刘珣《对外汉语教育学引论》北京语言大学出版社 2002年11月（2000年1月）。

李宝贵《对外汉语教学及汉语本体研究》北京大学出版社 2005年5月。

刘颂浩《对外汉语教学研究》教育科学出版社 2005年1月。

北京语言大学汉语水平考试中心《C. TEST 实用汉语水平认定考试 应试指南及真题分析》北京语言大学出版社 2006年12月。

興水優『中国語の教え方・学び方』日本大学文理学部 2005年11月。

原田寿美子「中国語文型リスト」『名古屋学院大学論集（人文・自然科学篇）』43巻2号 名古屋学院大学総合研究所 2007年1月。

——「中国語基礎語彙表の作成と利用について——
検定試験対応の観点から——」『名古屋学院大学論集（言語・文化篇）』12巻12号 名古屋学院大学総合研究所 2001年3月。

——『中国語学習のための基礎語彙リスト二種類』
（Discussion Paper No.51）名古屋学院大学総合研究所 2001年2月。